

第十話 「華氏451度」は究極の蔵書整理法？

●「本を焼く」ふたたび

「華氏451度」について語る前に、もう少し、空襲や火災で心ならずも本を焼いた話を続ける。

「昭和二十年三月と五月の空襲で、蔵書の全部を喪った」と書くのは中島河太郎（「彷徨月刊」一九八九二月号）。中島はミステリー評論家で、江戸川乱歩の書誌研究などで知られる。また、柳田国男に師事し、『正宗白鳥全集』編集に携わるなど、手を染めた研究の幅は広く、当然ながら本や雑誌、資料類の量はすごかったと想像される。

中島は大正六年（一九一七）六月生まれだから、昭和二十年の空襲のとき三十七歳。東京府立七中（のちの都立墨田川高校）の教師をしていた。前年の十一月から警戒警報や空襲警報が頻繁になって、東京で大量の蔵書を持っていることの危うさが迫ってきた。本の流通も出版事情も悪いなか、苦労して集めた蔵書を前に、毎日、気が気じゃなかったろう。しかし、「書物の疎開」は考えていなかったという。

「書物はやはり手許に置いているからこそ楽しいもので、戦争がどうなるやら皆目見当がつかないのに、遠くに預ける気にはなれなかったからである」

また、非常時に、よほど深い関係になれば、他人の大量の本を預かってくれるところなどないだろう。しかし、この「書物の疎開」ということばは、蔵書家の戦中を回想した文章でしばしば見かける。

中島の文章が掲載された「彷徨月刊」は、「古本屋一戦後の出発」という特集だが、国文学者の益田勝実が「被災水ヌレ本の恩恵」と題した文章で、「書斎の疎開」について触れている。益田は大正十二（一九二三）年、山口県下関市出身。戦中は、東京大学の学生だったと思われる。幹部候補生として戦地に赴き、昭和二十一年四月に華南の虎門を出港し、六十日余りをかけて浦賀へ復員してきた。

下関の実家へ戻ってみたら全焼。幹部候補生教育期に、外出時に購入し、姉の家に預けてあった竹内理三編『寧楽遺文』上巻ほか数冊だけが生き延びた。それを返してもらって、『寧楽遺文』などは「それから何回くりかえし読んだか」と言うが、気持ちはよくわかる。

兄が薬屋を営む小倉市に身を寄せた益田だが、さっそく古本買いに勤しむ。

「戦災を受けた人びとが、疎開しておいた本を持ってきて売るのが、小倉の古本屋には、探せばよい本が意外と豊富にあった」と、意外にも、庶民の間でも蔵書家による「書物の疎開」が行われていたことがこれでわかる。しかし、これは着の身着のままの生活をする人にとっては無縁の話である。

また、これは中島の文章で初めて知ったが、戦中の勤労働員で、生徒を引率して工場へ通う際、教師には工場から手当が出たという。教員の給料とあわせ「二倍くらい貰えたの

である」。その余剰収入を、すべて中島は本につき込んだわけだ。

しかし、それも空襲であっけなく「灰燼に帰した」。「焼跡に出かけて蔵書が白い灰の山になっているのを見て、茫然と立ちつくした。柳田国男先生の玄文社版『炉辺叢書』が、きちんと灰のまま残って、活字の部分が白く浮き出て読めそうだった。このまま持っていけばと思ったが、さわっただけでさらさらと砕けた」と印象深い光景を書き留めている。

紙の部分だけ燃え、活字の部分だけそっくりそのまま燃え残るということが、本当にあり得るのか。なんとも不思議な話である。また、それを「このまま持っていけば」読めると考えた、その執念もすごい。

●本が焼けて得したか損したか

空襲で本が焼けて「私は得をしたような妙な気分だった」と書く文章がある。詩人で哲学者・随筆家の串田孫一の「本とのつきあいについて」（『心と形について』みゆき書房）から。本が焼けて得するような状況がはたしてあるのか。

串田は私が敬愛する書き手の一人で、古本屋の棚にあると、所持未所持を問わず、いちおう手に取ってみる。古本屋の棚が似合う作家でもある。

ことは戦争中に古本屋で売られていたエミール・ブレイエ『哲学史』に始まる。革装の三冊（ということは原書だろう）を、本郷にある古本屋で見つけ、買おうとしたら、串田も顔見知りの主人は、T氏に取り置きを頼まれているという。いったんあきらめたが、その後、何度行ってもそのまま本は置いてある。T氏は串田の先輩でよく知っていたため、「一応私が買い、T氏がどうしてもというのならこの値段で向うにまわすことにした」。

ところが、そのT氏が何も知らずに串田の部屋を訪ねたところ、「それを見てあつと言った」。まさしく、彼が取り置きを頼み、古本屋にあるはずの本だったからだ。「わけを話したが、T氏はすぐに自分の家に戻って代金を持参、ブレイエの三冊を持ち帰った」。これ一件略着、とはいかないのだ。なぜなら、それから十日か半月で空襲があり、T氏の家も串田の家も焼けてしまった。

ここで冒頭の文章が出てくる。再度引くと「私は得をしたような妙な気分だった」。この蔵書家ならではの複雑な心境は説明不要か。もともとT氏が所有するはずだった本を、自分が買う。自分のものになるはずだったものが、T氏のもとへ戻る。串田は何も書いてはいないが、やはり悔しかったはずだ。三冊本のブレイエ『哲学史』とは、一九八五年から八六年にかけて、渡辺義雄訳により筑摩書房から刊行された三巻本『哲学の歴史』の原本か。戦時中、仏語による原本は当然ながら非常に貴重だったはず。T氏の手へ渡ったが、それが焼けたと聞いたとき、自分の家にあっても焼けているから同じようなものだが、ちょっと「得をしたような気分」になったわけだ。

ところが、話はこれで終わらない。空襲で家を失い、しばらく東京を離れていた串田が二年ぶりに東京の近くへ戻ってきた。落ちついてから本郷にある、『哲学史』を買った古本

屋へ行ってみると、なんと、焼けたはずの『哲学史』が棚にあった。事情を知っている店の主人も「不思議に思って市で買って来たのだという」。串田は因縁の『哲学史』を前の値段の二十倍でまた買った。そこで串田の推理。

「いまだにT氏に確かめずにいるが、私のところから持って行ってから空襲までの僅かのあいだに、お金につまんで別の店に売ったか、ぬすまれて泥棒の家がやけのこったのか、方々をまわって再び同じ書店の棚に並べられ、そこへ私がやってきたと思うより仕方がない」

常識的に考えれば、T氏が金に困って売ったというのが一番考えやすい謎解きだ。ちなみに、その『哲学史』が、因縁の本だと特定できたのは、革装のおかげである。洋書の場合、出版された段階は仮綴じの簡易製本で、購入者が好みにしたがって、それを業者に委託して革装するのが普通。中身は同じでも、外身は一冊一冊違うわけだ。

なお、串田も「書物の疎開」を考えていたことが、この文章でわかる。

「戦争の時も、新潟の山奥に預かってもらうところを決めながら、自分の不手際からもう運べなくなって焼いてしまった」と書いている。先述の中島河太郎の一文にもあるが、「空襲が始まってからは、もう書物の疎開輸送など思いもよらなかった」のである。串田も、燃えた本の死骸に立ち会っているが「しばらくして本の灰をかきまわしたら、厚い辞書のなかほどは燃え切らずに残っていた」という。真白な灰の山になったり、活字の部分だけ燃え残ったり、こうして厚い辞書の場合は、真中が燃え残る場合もある。変な言い方だが、本の燃え方にもいろいろあるものだ。

●あんな美しい火事は見たことがない

ついでだから、火事と書物の疎開について、もう一つ例を引く。

タイトルも「本を焼く」と、本章テーマそのままの文章の書き手は堀田善衛で、種々の「本を焼く」体験をしている（『本屋のみつくろい』）。

「本や原稿が焼けるということは、ある運命的なものがある、と堀田は考える。戦時中、上海へ渡った武田泰淳の原稿（「才子佳人」など）を、堀田が某所に保管し、これは無事、空襲を免れた。ところが、自分の長篇原稿をM（出版社の編集者か？）に預けておいたところ、これは燃えた。「もっとも燃えてよかったといった駄作であったろうが」と自嘲するが、コピーもバックアップもない時代、原稿が燃えたらそれまでで、当時は、とてもそんな悟り切った心境ではなかったろう。

また、永井荷風書名入り、河上徹太郎宛寄贈本『ぼく東奇譚』特製本という、いま現存していたら古書価値は目の玉が飛び出るだろう逸品を、「疎開をさせ、これは燃えてしまった」という。堀田は、原稿や蔵書を「方々に分散疎開をした」と書いている。それで、運命も「分散」して、生き残ったものと燃え尽きたものに別れた。

といった具合に、堀田の場合は、空襲による被害も「分散」され、全廃を回避したのだ

が、伏兵が待っていた。堀田は、一九五六年十月、アジア・アフリカ作家会議に出席するためインドへ渡り、翌年一月半ばすぎ香港まで戻ってきた。その香港の宿に電話が入った。「逗子の拙宅が火事で燃え落ちた」というのではないか。帰国してわかったが「書物はすべて燃え尽きた」。おそらく、疎開させて空襲を逃れた本も、そのなかに混じっていた。

「戦時中に刊行されたものは、戦後にはなかなか手に入りやすく、それに出版社や紙型までが焼けてしまっていて、さらには先輩知人に寄贈されたものも、多くは焼けてしまっている場合が、私の身のまわりにもあまりに多かった」と堀田は書く。戦後、本はなおさら貴重なものになっていた。それが、すべて灰となった。

しかも、なかには自分の本以外のものがあったというのだ。

一九五〇年代半ば、ある小説を書くための資料として、フランス文学者である渡辺一夫の「翻訳を除く著書の全部、氏御自身が保存をされている、いわゆる保存版の御本の全部を一時お借りすることをおねがい」した。渡辺はしばらく躊躇した後、それを許諾した。「氏としても、何か生皮を剥かれるような思いもなされたものであったかもしれぬ」と忖度する、その全著書もまた、この火事で燃えたのだった。堀田は、文章のなかで、何度も渡辺に詫びているが、お詫びのしようもない、とはこのことである。

堀田は逗子の海をのぞむ丘の中腹に家を建てていた。入江をへだてて対岸に住んでいたのが石原慎太郎。石原はこの堀田家の火事を目撃していた。のちに石原は、堀田に「家の燃えるその火が、海に映えて実に美しく、あんな美しい火事は見たことがない」と語った。失礼とも無邪気とも思える発言だが、いかにも「太陽の季節」の作者らしい、と感じぬでもない。

堀田はこの文章の末尾をこう締めくくっている。

「渡辺先生、御免なさい」

●「焚書」という名の蔵書処分

前回、最後に少し触れたレイ・ブラッドベリによる近未来SF『華氏451度』と、トリュフォーにより映画化された同名タイトルの映画について、以下、少し考えてみようと思う。前回に紹介した映画のあらすじを、再び、ここに掲げておく。

「情報の共有はテレビのみで、新聞も本も読むことも売ることも禁止された管理社会を描く。国家が文学を否定するわけだ。原作はレイ・ブラッドベリ『華氏451度』。秘かに本を所有する者は、見つけ出されると「消防署」がただちに急行、目の前で焼き尽くされる。タイトルの「華氏451度」とは、自然に紙が燃え出す温度のことである。読書家はついに本の所有をあきらめ、森の奥深くで隠れ住み、一人が一冊の本となる。つまり、自分で選んだ本を丸ごと一冊暗唱して、自分自身がその本と化すのだ」

原作も基本的に、このままと思ってさしつかえない。

消防庁という名の「焚書」役所に務めて十年ちょっとのモンターグは、それまで自分の

役目や、本を徹底的に排除する政府の方針をそれまで疑ったことがなかった。そこに揺さぶりをかけるのが、ある日出会ったクラリスという娘。映画ではモノレールのなか、原作では地下鉄から家までの帰り道、という設定になっている。映画では妻のリンダとクラリスは、ジュリー・クリスティという女優が一人二役で演じている。当然ながら映画のモンターグは、リンダが髪型こそ違え、妻とよく似ていると認識する。

原作ではクラリスはモンターグ邸の新しい隣人で、二人は「銀色にかがやく深夜の舗道」を同じ方向へ歩いていく。歩く途中にクラリスが聞く。「こんな話をきいたんだけど、ほんとうかしら？　ずっとむかし、火事をあつかうお役人の仕事は、火をつけるのじゃなくて、消すことだったんですってね」。モンターグは答える。「そんなばかなことがあってたまるか。家というものは、むかしから、焼けないようにできている。ぼくのことばにうそはないぜ」。

しかし、問答の末に、モンターグは初めて、揺るぎなき自分の仕事や人生に、小さな亀裂が入る。そして、ありうべからざるタブーを犯す。つまり、本を隠し持ち、読むようになるのだ。

それが国家反逆に当る、危険きわまりない行為であることを、立場上、誰よりも知る自分が、自ら破る。映画では、眠そうな目をしたオスカー・ウェルナーがモンターグを演じ、トリュフォーは最後まで彼の演技が気に食わなかったようだ。しかし、私はアクターズ・スタジオ流の名演技ではなく、自分でも説明のつかない衝動に巻き込まれて破滅（開放？）していくモンターグは、ウィーン生まれで、ナチスに反抗し、徴兵検査にわざとひっかかって戦地では雑役に甘んじたという俳優が似合っていたと思う。

●本はいかに燃やされたか

ハヤカワ文庫版『華氏451度』解説で、SF評論家の福島正美は、ブラッドベリがそもそもこの作品を書こうと思いついた背景について触れている。

「その当時——一九五〇年代初めごろ、全アメリカを吹き荒れていた兇暴なマッカーシズムの嵐に、生来の自由人としての彼が、はげしい怒りにかりたてられたからであった」

「マッカーシズム」とは、一九五〇年代、米ソ冷戦を背景に、共和党議員マッカーシーの告発に端を発する「赤狩り」のこと。とくにハリウッド映画界が標的になり、多くの映画人が職を失い、またアメリカを去った。ロバート・デ・ニーロ主演による「真実の瞬間」は、この「赤狩り」が、いかにアメリカ映画界に禍根を残したかを描き出している。

福島によれば、ブラッドベリはマルキストでも共産主義のシンパでもなかった。ただ「マッカーシズムの持っていた盲目的、狂信的な反知性主義を、許すことはできなかった。彼はマッカーシズムが、政界から経済界、ジャーナリズムから映画界、一般市民社会にまで、その兇暴な力をふるうのを、ただ黙視していることができなかった。それは、民主主義と自由の名を借りたリンチにすぎなかった」と解説する。

もちろん、『華氏451度』には、第二次大戦中にナチス・ドイツの手により行われた「焚書」の記憶もまちがいに重ねられている。ナチス政権に煽動された学生たちは、一九三三年五月十日、「非ドイツ的」とみなされる本、約二万五千巻を集めて火をつけた。このとき、ハイネが放った「本を焼く者は、やがて人間を焼くようになる」という言葉は、のちのアウシュビッツを予感させて、人類史に掲げるべきスローガンとなる。ハイネの著作もまた、焚書の対象となったのである。

原作でも映画でも印象的なシーンの一つ。家中、いたるところに本を並べた老女のもとへ、モンターグ始め「消防庁」が踏みこむ。そして一箇所に本を集めて、映画では青色の石油をまき、火を放つ。老女は笑いながら詩を朗読し、「私から本は奪えないわ」と高らかに宣言し、本と一緒に火に包まれ死んでいく。

次々と燃えてゆく本を、映画ではたっぷり映す。『ダリの世界』が風にページをめくられ燃えていく。トリュフォーがゴダールたちと作った雑誌『カイエ・デュ・シネマ』がそこに混じっているのは、ご愛嬌だろう。

じつは、この老女の家で、モンターグは初めて本を盗み、隠し持つ。この本が何だったか。本を焼き尽くしてきた男の記念すべき読書初体験は、ディケンズ『ディビット・コパフィールド』だった。フィズ筆の挿し絵の入ったオクスフォード版で、たぶん古書価はなかなかのもの。モンターグはこれを朗読する。つまり、黙読ができないのだ。

その他、老女に家で燃やされたのは、ナボコフ『ロリータ』、レイモンド・クノー『地下鉄のザジ』、『チャップリン自伝』などだった。これは、トリュフォーの好みに違いない。

●本はいかに隠されたか

映画「華氏451度」では、どんな本が燃やされたか、に目が行くが、もう一つ、消防庁の摘発を免れるため、室内のどんな場所に隠すかが細かく映し出される。

たとえば、天井の室内灯のスイッチを入れる。すると、電灯の笠に影ができる。そこに本が隠されている。テレビのブラウン管をはずすと、なかに本。同様に、スチームストーブの上蓋をはずして発見、丸テーブルの板がぐるりと回せるようになっていて、そのなかにはやっぱり数冊の本が隠されている。ポップアップのトースターに、という手もあった。

トリュフォーは、これを半ば楽しみながらアイデアを出し、撮影しただろうと思われる。映画「シンドラのリスト」で、ユダヤ人居住区を徹底的にナチスが搜索するシーンでも、魔手を逃れるため、あの手この手で、ユダヤの人々が隠れるアイデアが映し出されていた。それは命を懸けての「隠匿」であったが、人は「隠す」「隠れる」ためにあらゆる手を考え出す動物であることを示していた。

本を隠匿していることがばれ、モンターグが搜索される側に回ったとき、知り尽くした手口の通り、あまりに正直に隠しているため、逆に次々と本は見つけ出されていく。いかに本をうまく隠すか。そんな経験はできればしたくないが、これも「蔵書の苦しみ」と言

っていいだろう。